猟期来る

森岡　正作

村衆の顔の尖りに猟期来る

山の音は山毛欅の擦れ合ひ牡丹鍋

乾ききる音の二つに熊撃たる

茶が咲けり畝を隔つる長ばなし

悪友の呼びに来さうな小春かな

言ひ訳はおでんの蛸を噛みしめて

白息の太きが今日の好敵手

雪降りぬ

雪国秋田と言っても今は雪が積もっているという景が少ないと言う。とんでもないドカ雪が来ても、消えてはまた降るという感じで根雪というものがないのであろう。私が高校生だった頃はいつも正月には雪が積もっていた。特に元旦の朝はすべての音という音を雪が吸い尽くしたかのように静かで、眺め渡す田圃は白一色であり、背景の山は墨絵のように見えたものであった。

登四郎先生に〈**雪降りぬ忘れるほどに遠くの日**〉という御句がある。私は白銀世界の景色に見とれるばかりであったが、詩人、文学者、哲学者には「忘れるほどに遠くの日」というフレーズがなければならない。今思えばそれは確かに厳粛な景であった。

こうした雪の礼賛も、大雪となってマイナスの度が過ぎれば生活の害となる。自然との共生などという難しい問題には触れず、今は懐かしい雪景色を思い出すばかりである。